

第十八回 松本清張研究奨励事業

松本清張の政治思想——言論界、大学、歴史記述

京都産業大学准教授

倉科

岳志

北九州市立

松本清張記念館

目次

はじめに

『昭和史発掘』の構造

清張の天皇制イデオロギー批判

おわりに

注

21

17

9

4

3

はじめに

松本清張の『昭和史発掘』は一九六四年から一九七一年まで『週刊文春』に連載された歴史作品である。この作品の執筆動機と大いにかかわる『象徴の設計』は一九六二年から六三年まで『文藝春秋』に連載されている。周知のことだが、この時期に重なるようにして司馬遼太郎が一九六二年から一九六六年まで『竜馬がゆく』、一九六八年から一九七二年まで、歴史小説『坂の上の雲』を産経新聞の夕刊に連載していた。この同時代性、そしてあるべき日本人を描こうとした司馬遼太郎と日本社会の闇をえぐり続けた松本清張の作品の対称性からして二人は相当に意識し合っていた<sup>1)</sup>。

本研究では『昭和史発掘』に垣間見られる松本清張の政治思想を、『象徴の設計』『砂の審廷』『北一輝論』『小説東京帝国大学』『史観宰相論』ならびに近代史に関する諸論考とを関連づけながら内在的に検討する<sup>2)</sup>。『昭和史発掘』の学問的評価は「討議松本清張と歴史への欲望」のなかで小森陽一と成田龍一が語っている<sup>3)</sup>。清張は丸山眞男の重視した「下からのファシズム」をより深く掘り下げたうえで、「国民一人ひとりのなかに戦争への欲望もあった」のではないかとの指摘をなしたというのである。ただ、成田は「清張が歴史家として振る舞おうとするところが自らの足場を崩していくと私には思えてならない」とし、次のように述べている。

「清張がやろうとしているのは歴史学批判であって、歴史学の解釈に対しての批判です。あるいは歴史学が一次史料を重んずるといったとき、その根拠を問うという形でのアカデミズム批判です。しかし、に

もかわらず、清張が歴史家としての作法を反復することによって自説を論証する行為は、ほかならぬその歴史学のミニチュアを作っています<sup>4)</sup>」。

だが、はたして本当に清張の叙述は歴史学の「反復」や「ミニチュア」なのだろうか。むしろ、清張はアカデミズムへの復讐感情を昇華する形で同じ土俵に立って歴史家たちと正々堂々と勝負したとの解釈も可能なのではないか。清張がこの作品に並々ならぬ意欲を見せていたことは、『昭和史発掘』を「代表作」と認識していた逸話からも理解される<sup>4)</sup>。右に示した筆者の仮説と同じ方向で清張を評価する作品に保阪正康の『松本清張と昭和史』がある。保阪は『昭和史発掘』におけるテーマを「軍事」と「非軍事」に分け、次のように述べている。

「こうした非軍事的テーマに分類される事件（社会的事件といってもいいのだが）は、私たちの国が昭和前期という時代に抱え込んでいる病根、具体的に言えば情報が閉鎖された空間、あるいは天皇を神権化する権力の抑圧空間のなかで、そこに行き着くまでにさまざまな問題があったという見方で読み取ることができる。昭和十年代の超国家主義の空間にいきつくまでに権力が具体的に力を得ていくプロセスが活写されているのである<sup>5)</sup>」。

第一に、保阪は清張が権力の「理性的」な側面を抉り出しつつ、その展開のなかで強く抵抗した個人を描き出そうとしたがゆえに、軍事と非軍事のテーマが対峙するような構成になったのではないかとの見解を打ち出している。第二に、清張は国益に基づく権力側に立った歴史ではなく、「国民」の視座で歴史を通観しようとしたとする。第三に、清張が北一輝のなかに潜んでいた「右翼、左翼の両翼を超えた革命理

論」を見抜いていたと論ずる。

本研究では保阪の業績を基礎にしながらもさらに一歩進めて、清張のフィクション作家としての腕がじつはノンフィクションを描くときに生きていることを具体的に明らかにする。また、清張のアカデミズムへのルサンチマンが執筆のエネルギーに代っていたことに同意しつつ、清張が自らの在野という立場を自覚していて、その思想空間の意義について深く考察していたことを解明したい。そして、そこに存在するであろう清張の政治思想を検討する。そのために本稿では、清張の著作群にかけられているフィクションやノンフィクションという枠をあえて取り払う。

### 『昭和史発掘』の構造

清張の近代史観の中核を表現しているともいえる『昭和史発掘』の構造に着目してみよう。というのも、この著作はその後の清張思想の展開を決定づけた作品だからである。清張はまず政治と軍部の経済的癒着という問題から書き起こす。「陸軍機密費問題」と題した章の中で、政友会が軍部とつながりのある右翼団体に資金提供していた可能性が指摘される。政府と軍部の権力は社会に深く根をはり、両者を危うくするような動きは封殺されていたばかりか、この事実を証明しようとする資料そのものも焼却され、歴史家が再構成することも困難となっていた。政治や軍事は市民に直接手を下さずに社会の諸勢力を巧みに利用するというわけである。

「昭和七年八月現在の国家主義団体の数は、同じく内務省調べによると、約百団体ある。これは満州事変突発後だが、昭和四年末は、その三分の一とみて三十団体はあったであろう。そして、彼らのほとんどは満州への進出に眼をつけ、こぞつて幣原対支外交の軟弱を攻撃していた。」

国民政府では佐分利公使の就任を大いに歓迎した。このことは、これら国家主義団体に刺戟を与えずにはおかなかった。ことに佐分利が仕事の出来る男であればあるほどそうである。また佐分利の背後には元老西園寺の有形無形の擁護があった。とすれば、なおさら彼は注目されたに違いない。

そこで、佐分利の怪死にこれらの団体のうち何らかの影が射してはいなかったのだろうか、という想像は誰にでもおこることだ。」

このような可能性の検討はアカデミズムの歴史家には難しく、これこそが自分に託されていると清張は自覚していたはずだ。

社会を間接的に統制していた政府と軍部の関係は軍部が優位を占めるようになる。そのきっかけをつくったのが田中義一であった。かれは軍で力を蓄えて政界に進出した。そのかれが関東軍による張作霖爆殺事件を追及しようとしたとき、軍からは田中が裏切り者に見えた。田中は政治が軍を止められないと見るや今度は宮中から圧力をかける。この圧力に対する青年将校の反発心こそが軍内部の下剋上の雰囲気醸成し、外部に対しては暴走を引き起こすことになる。

清張は更に軍隊内の身分差別を指摘し、それが軍規律の上下関係をいつそう増長させていると説く。しかも身分差別は徳川時代の遺物でもあるために容易には拭えない。この構造の中で青年将校の上官に対

するルサンチマンは蓄積されていったということになる。

青年将校の怒りの背景にはむろん経済的な農村の貧困がある。かれらは自分たちの故郷の貧困の原因を政治の不合理に見る。清張によれば軍上層部はこのような若手将校らのメンタリテイの中に社会主義や共産主義といった幻影を見出していた<sup>7</sup>。

清張は政治、軍事、社会の動きを事細かに語りながらも同時代の文壇について触れるのも忘れない。あたかも、当時の日本全体が狂ってしまった訳ではなく、文化生活も確かに存在したのだといわんばかりである。この対比によって、日常生活の背後で刻々と事態が進行していき気がついた時には誰も止められなくなるほど軍部が強化されていったことを読者に訴えたかったのだと思う。

水面下で進行していた出来事の一つとして小林多喜二の死の描写を見ると、当時の状況がいっそう不気味に見える。

「天皇制に反対する彼らには、どのような暴力を加えようと、官憲は『天皇陛下の命令』という『使命感』によってその狂暴性を倫理化することができた。

拷問するほうは、その実行途中で次第に人間の内側にひそむ野性をむき出してくる。無抵抗の人間の血を見て昂奮し、その昂奮がさらに彼らの加虐行為を駆り立てる。そこには数人で行為を行うという群集心理もある。また、上司や同僚の目前で勇敢にそれを行うことができるといふ英雄心理にもなる。

拷問を行う人間も、傍観している人間も、ひとしく動物的な野性に戻っている。周囲に即製の防音装置をめぐらしたこの密室の中で何を行おうと思いのままだった。人間の本能に巢喰っている残虐性が――

幕末の絵師月岡芳年の描く『無残絵』を好んだ人間のサディズムが、警官たちの血を沸らせたのである。かれらは眼をつりあげ、蒼白になった顔に歪んだ笑いを浮べ、無抵抗者にリンチを加えた。たとえ、相手がそれで死のうと、いっこうにさしつかえはなかった。そこは警官医によって、いつでも『病死』の診断が用意されているからである<sup>8</sup>。

他方、軍国主義化に対してアカデミズムが歯止めをかけることができなかった事実には清張はあくまで冷淡である。戸水問題も結局のところ学問の自由を守る闘争ではなく、大学教授のエリート意識から発せられた問題に過ぎなかった。

滝川事件についても清張の立場は同様だ。この事件は京都帝国大学の滝川幸辰の著作が赤化思想であるとされ滝川が罷免となった事件である。このときの京大の教授、学生は反対運動を展開するが文部省の切り崩しによってかれらの運動は崩壊する。たとえ、滝川の著作が「純学問的」であったとしても、アカデミズムがかれのために一致して戦うなど「絶対」にあり得なかった<sup>9</sup>。その理由を清張はいくつか挙げている。かれは教授連の学問的良心を否定しているわけではない。ただ学問に従事するかれらも給与を国からもらう官吏であり、さらに言えば食べて生かねばならない人間なのであった<sup>10</sup>。

清張はこのアカデミズム内で起こった天皇機関説に「日本を破局に暴走させた」切り替えポイントを見る。

美濃部学説は「国家を主権者のある法人的団体と見なす。日本の場合、この法人の主権者は天皇の『大権』である。この大権は天皇が勝手に行使するものではなく、国民の利益の上に立って行使される。つまり、天皇の独裁の範囲を縮小し、それだけ議会の権限を拡大するという一

種の議会在権的なものだった。美濃部は、天皇の意義をその人格的存在と、法人団体の代表的存在と、二つに分けたのである<sup>12)</sup>。

こう述べた後、次のように本質を示す。

「大体、明治憲法は、明治十四、五年ごろから起こった自由民権運動の風潮に押されてつくられた点を考慮に入れなければならない。したがって、明治憲法は、封建的な専制政治の面と民主主義的な面との二つをもっていた。つまり、明治憲法は、絶対主義の面からも解釈できるとし、民主主義的な面からも解釈でき得るのである。美濃部の学説は、明治憲法を最大限度に民主主義的に解釈しようとしたものである<sup>13)</sup>。

その後、美濃部が追い詰められていく過程が事細かに語られる。その際、清張は美濃部の見解とその可能性に共感を寄せながら、美濃部の同時代人であり明治憲法を作成した伊藤博文自身の構想にも天皇機関説が内在していたことを指摘する。

「伊藤博文は明治憲法を作るときに天皇の大権を國務大臣が輔弼するという道をつくった。かたちの上では天皇の執政権を臣下が輔佐し、その命を受けて政務の代行をするというのだが、その責任はすべて輔弼の臣下が負うことにした。したがって伊藤は実質的には天皇機関説論者だったが、外装的には、天皇神権説の支持者だった<sup>14)</sup>。

清張の意図は、滝川事件を境にして、天皇神権説の優位が確立していくということである。天皇神権説が前面に押し出されることによって憲法十一条「天皇ハ陸海軍を統帥ス」の一文の意味が統帥権の独立として、軍が天皇直属の機関とする考えが明瞭となる。そうすると、内閣は軍の方針に口を出せないばかりか、軍は自らの出す大臣をひきまげて内閣を崩壊に導くようになる<sup>15)</sup>。

この天皇神権説は日本の近代国家形成における中心思想となった。清張によれば、明治の為政者は国家に対する忠誠への別称を天皇への忠義と考えた。国家の忠誠という觀念自体のなかった日本において同様のものを創出するには、天皇を神とすることが早道であった。百姓や町人ら一般人民は氏神を持ち、家には神棚を祀っていたから、この習俗的信仰を利用し、天皇を現人神にすれば、実質的に国家への忠誠も確保されるという訳だった。さらに、この天皇神権説は二重構造を持つことにもなる。清張の言に従えば、軍は日本国民のなかでも『軍人勅諭』に見られるように特権的な位置にいた。

「朕ハ汝等軍人ノ大元帥ナルソ。サレハ朕ハ汝等ヲ股肱ト頼ミ、汝等ハ朕ヲ頭首ト仰キテソ其親ハ特ニ深カルヘキ」。

天皇の身体の一部を支える存在としての軍人は当然にして一般国民に対する優越感を抱くようになる<sup>16)</sup>。

軍人が特権意識を抱き、天皇と直接結びつく体制を目指して実際の行動に移るまでにはもう少し説明が必要である。清張は将校たちが二・二六事件を起こした背景を経済に見る。しかし、それは将校たちの行動に直結しているわけではなかった。より直接的原因は官僚組織としての軍のあり方とそこに当時蔓延していた下克上の風潮である。軍組織には陸大卒とそうでない者の間の隔絶したキャリアの相違があった。その差は「天保銭」の有無という明示的な形で存在していた。「天保銭」とは、陸大卒の軍人が胸に付けた徽章のことである。故郷が貧困にあえいでいる青年将校から見ると、「天保銭」組の軍上層部（師団長、旅団長、連隊長、大隊長など）は「無氣力に愉安をむさぼる小役人」に見えたと清張は語る<sup>17)</sup>。

『昭和史発掘』は、二・二六事件の前史となる五・一五事件、三月事件、十月事件といった皇道派による諸々のクーデタを叙述し、その延長線上で二・二六事件を語る。

前史の叙述で理解されるのは、天皇機関説が道德的批判から政治問題化し、これが皇道派によつて統制派打倒の道具とされるまでの顛末である。その中で、皇道派が軍の外部にも在郷軍人会や右翼団体という後盾があつたことに触れられる<sup>18</sup>。

ここで言う皇道派とはソ連を仮想敵国とした山県有朋につらなる保守勢力であると説明される。かれらは軍による政治的主導権獲得後の計画性もとくになく、精神主義であつたという<sup>19</sup>。これに対し、統制派はより合理的で満州に侵略するためには国内を統制経済下に置くべきと主張した人々であるとされる。ただし、清張の眼からすれば、結局のところ両者の理念にはそれほど大きな違いはなかつた。巨視的に見れば侵略戦争を企てている点で同じだといふのである。

これらの派閥のうち皇道派であつた陸軍中佐相沢三郎が統制派の長であり陸軍省軍務局長永田鉄山を殺すという事件が一九三五年八月に起こり、これが二・二六事件の伏線となる。この事件を知つた青年将校の興奮を清張は次のように直接引用の形式でかれら自身に語りしめている。

「あの年寄りの相沢さんがやつた、われわれ若い者がやらなければいけないことを老先輩が先に実行した、申し訳ないことである。相沢さんに濟まない、われわれは遅れをとつた、こうしては居られない」。

このような、実証に裏付けされた、がい然性の高い心情の吐露にこそ清張のノンフィクション作家としての真骨頂がある。アカデミズムの

人ならば間違いなく躊躇したであろう一步をかれはあえて踏み出す。

清張が強調するのは、相沢事件が青年将校に与えた心理上の衝撃だけでなく、時間の制約による焦燥感である。相沢事件で危機意識をつのらせた軍上層部は歩兵第一連隊と歩兵第三連隊を「危険分子」として満州に移転させることを決定する。満州に渡れば戦死するかもしれないし、現地でバラバラに引き離されてしまふかもしれない。ならば決行は今しかない、というのが青年将校らの心理であつたといふのである<sup>20</sup>。ただし、清張は決起した下士官には「同志」的信念はなかつたと判断している。かれらは軍隊的な命令への服従と、指揮官に対する個人的信頼、戦闘集団としての団体的結合による相互強制的な呪縛、そして興奮による自失などによつて行動していたにすぎない<sup>21</sup>。かれらの人間的紐帯の中心にあつたのは抗命罪であつた。この罪は戦場における抗命を想定していたはずだが、これが平時にも拡大解釈されたのではないか。加えて、兵は命令に抗えば下士官や上級兵から制裁を受けることが慣例となつており、二・二六事件のような武器を携えている場合には命の危険もあつたに違いない。このように清張は推理する<sup>22</sup>。だから「奉勅命令」が下つたときになだれをうつて反乱軍は崩壊したと結論する<sup>23</sup>。

清張は時に青年将校の心の奥底にまで入り込み、時に宮城の上空から鳥瞰して全体像を描く。ミクロとマクロ両視点で二・二六事件の全容を語るさいに、軍上層部と下層部の動き、各派閥の合従連衡や部隊の動きも事細かに立体的に事件を記述していく。

本稿の目的は、二・二六事件の叙述ではないので結論だけを端的に述べておけば以下のようになる。戒嚴令によつて軍部内閣を作ろうと

した決行将校らは、二月二六日に決起し首相官邸、警察庁などを襲い、内務大臣齋藤実、大蔵大臣高橋是清、教育総監渡辺錠太郎を殺害、侍従長鈴木貫太郎に重傷を負わせ、陸軍省、参謀本部、国会、首相官邸などを含む永田町一帯を占拠した。しかし、逆に幕僚派によって出された戒厳令により叛乱軍とされ、鎮圧の対象となり、最終的には戒厳令下での軍事裁判により将校の大半は死刑判決を受け処刑された<sup>24</sup>。

『昭和史発掘』は、この事件が軍部による政治への介入のための脅迫の道具として利用された事実を指摘している<sup>25</sup>。二・二六事件後に軍部で主導権を握る人々(いわゆる新統制派)の政治構想を説明し、肅軍と称しながら陸軍大臣現役制を導入することで実質的には反対派の予備役が大臣になる道を塞いだ過程を語る。そればかりではない。軍部の指導権を握った新統制派が社会を軍国主義化し、戒厳下における特設陸軍軍法会議により、民間人をも軍法会議にかけることを可能にしていったというのである<sup>26</sup>。新統制派は相沢事件の公判内容が青年将校や右翼団体へのアジテーションとなった経緯を踏まえ、同じ轍を踏まないために非公開、非弁護、非上告で進められる特設軍法会議での事後処理を望んだ。この裁判過程を分析するなか、清張は法理上重要な問題にぶつかる。下士官が犯罪を遂行するよう上官より命令を受けた場合、下士官の行動にはどのような責任が生じるのかというのがそれである。同時代人の判士らの研究は次のようになる。清張の要約を見てみよう。

「①下士官は兵卒と違って判断力があるから上官の命令が国権に抗したもので間違っていると知れば、その旨の意見具申をし、死を賭しても諫止しなければならない。」

②しかし、犯罪たる意識がなかったものについては刑事責任はない。  
③また、たとえ下士官がその命令に犯罪意識を持ったとしても、日ごろの幹部の教育がその正当な判断を失わせ、犯罪を認識させずに行動に従わせたとすれば責任はそのように教育した幹部の側にある<sup>27</sup>。  
このような法理上の問題点を整理し、裁判の叙述を進める清張は、この期間全体が戒厳下であったのも偶然ではないと見る。治安当局の恐怖は、裁判により再び反乱がおこるのではないかという点にあった。したがって、「戒厳令下だから裁判を急いだのではなく、裁判終了を急ぐために戒厳令を続行したのである<sup>28</sup>」と論じる。そして、この裁判の内容自体が陸軍省の意図を強く反映したものであったとする<sup>29</sup>。その証拠に判士の選択や法務官が公訴した範囲だけを審理する「枠」があったというのである。その上で、この裁判の目的は、二・二六事件が軍内部の者によって自主的に行われたのではなく、すべて外部民間人による謀略的指導だったとすることにあった、と論じる<sup>30</sup>。外面的には軍の不祥事を隠蔽し、今回の責任を社会の側に帰し、内面的には皇道派の一掃を図るということである。

二・二六事件が終結すると、軍部における新統制派の覇権が確立するが、清張はその意味するところを的確に解明して見せる。すなわち、それまで四分五裂であった民間の右翼団体が軍部の新体制に呼応する形で統一されていったというのである。

「この軍の新しい絶対体制と、それに追従する右翼の一本化とは軍の独裁専行の新たな出発点を意味した。」

このことは国民も気づかず、政党、財界、言論界も気づかず、もっぱら『肅軍』の現象に目をとらわれてこれを歓迎した<sup>31</sup>。

清張は『昭和史発掘』を締めくくるにあたって次のように述べている。「これまでの二・二六事件関係書が将校のみに絞られ、参加の下士官の触れるところがなかったのは片手落ちというよりも完全なあたりではない。将校だけに限定しては事件の本質はわからない<sup>32</sup>」。

二・二六事件において決起した人々は国家改造計画を上部に「要望」することしかできなかった。かれらにできたのは「独断専行」までであり、その先は天皇の「聖断」に頼るよりほかはなかったと述べる<sup>33</sup>。

だとすれば、昭和を暗い時代に導いたのは天皇だったのか、「君側の奸」だったのか、あるいは天皇制そのものであったのか。

### 清張の天皇制イデオロギー批判

清張は天皇制の特徴に着目する。天皇制において天皇個人はあくまでも国家利益を体現するのであって、天皇がこの国益に反した命令を下した場合には、たとえ天皇の命令といえども封じ込められるということ、これである<sup>34</sup>。それがゆえに、二・二六事件を境に軍部は「二・二六」の再発をちらつかせて政・財・言論界を脅迫し続け、重工業財閥を抱え、戦争体制へと進む。恐るべきことに、この変化は太平洋戦争が勃発するまで、国民の眼にはわからない上層部において静かに、確実に進行していた、というのであった<sup>35</sup>。

清張は『昭和史発掘』執筆後に北一輝論を発表するのだが、それは日本の軍国主義化に果たした北のイデオロギー上の役割を天皇制との関係で説明するためであった。期しくもそのイデオロギー批判は、内

容的には一九六二年に小説的手法で描いて論争となった『象徴の設計』を補完するものであった。ただし、今回は歴史評論という形で論が展開される。

清張が北を取り上げた同時代的な動機については筒井清忠が述べているように、一九七〇年当時、村上一郎の『北一輝論』をはじめとして、北に対する共感を含んだ評価が生み出されており、清張はこうした風潮に水を差すことを目的として執筆していた<sup>36</sup>。

この点では私も同感であるが、筒井が北の行動を追った清張の『北一輝論』の後半を高く評価するのに対し、私は北のイデオロギー分析を中心とした前半の意義に触れてみたい。というのも、本書を清張の近代史叙述のなかに位置付けてみると、その後半部はかなり『昭和史発掘』の記述と重なる部分が多く、それに比して筒井が「それほどまでに攻撃しなくても」と感じた、北に対する清張の批判こそが当時の新しい叙述部分だったからである。しかも、この前半部は単に同時代的風潮に反応して書かれただけではなく、清張の長らく抱いていた問題と深いところで共鳴する内容でもある。すなわち、天皇神権説を支えたイデオロギーへの危機意識である。清張が北に対して厳しい批判を展開したのも、イデオロギーというものが一度書かれると何度も読み返され、何度も影響力を回復しようと考えていたからにはかならない。しかも北の場合、その思想がいかにようにも解釈されうるという危険性を内包していると清張は見ていた。事実、『北一輝論』のなかには次のような記述がみられる。

「しかし、この刑死によって北は急進的な超国家主義者として世間の目に映り、敗戦後の最近ではそれがラディカルな革命家として一部

に受け取られ、拡大視され、賛美にも近い評論が出ているのは広く知られているとおりである。これは北一輝の姿を勝手に歪めたものであり、幻想にすぎない。〔…中略…〕

実際の北一輝は矛盾の多い性格であり、それがそのまま行動の矛盾となつている。北のような『天才』的な資性、鋭い感受性の人間は、そうなりやすいのである。むしろ病的な神経を感じる<sup>37</sup>。

清張の目的は、北のイデオロギーの空虚さを白日の下に曝すことであつた。まず彼が俎上に載せたのは北の歴史観である。清張によれば、北は明治維新までは国民全部を乱臣賊子と見ていた<sup>38</sup>。そして、明治維新で国民と天皇は貴族階級を倒し、民主主義の時代が訪れたとし、国民も天皇も国家の理想とする目的に等しく働いたという点で平等であると論じていた。このような北のロジックに対し、明治維新は薩長の下級武士と公卿階級による旧体制の破壊であつて、北は勤王下級武士を「国民」全体に広げている、と清張は批判する<sup>39</sup>。さらに、維新以後は天皇が国家の所有者から国家の特権ある一分子へと進化したとする北の論に、清張は次のように切り返す。天皇に対する特権付与は、国民の投票とか選挙とかの民主主義的な手続きによらないのだから天賦特権論ということになり、天皇そのものが国民と等しく民主主義の一国民どころではなくなる<sup>40</sup>。この北の矛盾を指摘した後も、清張は攻撃の手を緩めない。北の論理を延長していき、その結末まで演繹する。すなわち、北の言うところの維新後の民主国家では「眼前の君父」が存在しないかのように見えるが、実際は天皇が直接の「眼前の君父」になり、この天皇に対する乱臣賊子が生じる可能性は無視できないではないかというのである<sup>41</sup>。

この可能性を排除するために考え出されたのが、天皇と軍人とを結びつけ、両者の間に古代や中世よりもさらに厳しい封建的主従観念を創出した『軍人勅諭』であると論じる。そして、このロジックが二・二六事件でどのように機能したのかについて次のように述べている。

『日本改造法案大綱』は軍人による政治介入のクーデタ手段を説くが、その中心には「国民の天皇」なる幻影を置く。しかも一方の運動面では天皇が直接命令するかたちの『統帥権』をとらえ、政治がこれに介入するときは『統帥権干犯』なる新語を北はつくる。まさに北の発明した『統帥権干犯』の語は、いかなる政治家も将軍もその一撃によつて頭蓋骨を砕かれ、痴呆症にかかった如く言語、行動が麻痺したのである<sup>42</sup>。

このように清張は北のロジックの帰結点まで深く追い詰めていき完膚なきまでに破壊する。返す刀で北の空虚なイデオロギーの起点ともいえる特権ある国民としての天皇という主張も切つて捨てる。すなわち、北の論理を支える中心には、「神格」を持った天皇がおり、北はこれを事実論だとして議論を封殺している。しかも、そもそも学問的に、もしくは法理にもとづいて論を進めてきたはずの北が、ここに至つてそれまで避け続けてきた事実論に依らねばならない点こそが、北の根本的矛盾であるとする<sup>43</sup>。

これほど執拗な批判を北に浴びせたのにも理由がある。『北一輝論』から遡ること十年前の一九六三年、清張は前年に出版した『象徴の設計』に対して林房雄から激しい批判を受け反論していた<sup>44</sup>。実は、この林との論争こそが、清張をして近代史へと向かわしめたきっかけであつた。清張は林のような論者に対して、決定的に勝利するには実証しかないと考えた。なるほど、清張の年譜を眺めると、この林との論争

の翌年に『昭和史発掘』の連載が始まっている。この連載は七一年まで続くのだが、その間、六五年には、『小説東京大学』、六六年には『火の虚舟』といった近代日本史の著作を次々に発表している。『北一輝論』はいわば、清張が近代日本史について学び、充分な研究の蓄積の上で出した、渾身の一作ということになる。筒井が指摘したように、確かに清張は、同時代に書かれた村上一郎の『北一輝論』に触発されて筆を執った。ただ、その時の清張の胸に去来していたのは自らを近代史研究へと走らせた林の容赦のない言葉に対する怒りだったろう。同じような怒りは北の創出したイデオロギーにも感じていたはずなのである。清張は日本の言論界に継承されている天皇制イデオロギーと切り結ばねばならないと考えた。ここにこそ、清張の『北一輝論』執筆の、否、ひいては清張の近代日本史諸著作執筆の根本動機がある。

以下ではこの動機をつくりだしたきっかけとなった林・清張論争を再構築する。その際論争の種となった『象徴の設計』の内容にも触れる。

一九六三年五月二八日付朝日新聞において、林房雄は清張の『象徴の設計』が、「明治天皇制成立の内面を描き出そうと努めた長編だが、小説とも史論とも政界裏面史ともつかないものとなってしまった」とし、この作品を「手に入る限りの材料を、吟味もせず、ごった煮にして、ドンブリに山盛りしてつきつけた、そんな感じの荒っぽい作品」と断ずる。そして、清張の論評と解釈を「強引なこじつけ」、「歴史の偽造」と評価したばかりか、『象徴の設計』を「怪文書」とまで言って挑発している。具体的な批判のポイントは二点ある。第一が、清張の天皇論は「政略的」なそれであり、「史実に反」する「俗論」であるという批判である。

林によれば、天皇は簡単に利用したり打倒したりできるものではないという。第二が、清張は松方財政が自由民権運動の弾圧のために行われたと解釈しているが、実際には、維新政府を破産から救うためになされたとの反論である。

このような批判のなかでも第二の点について清張は同年六月七日の朝日新聞紙上で反駁している。そのさい、林の発言を取り上げる。林は「すべての明治人が官も民も立場こそ異なれ、必死に苦闘していた」とするが、清張は「官」と「民」との立場が違っていた点が問題ではないかと反論している。そして、相互の属していた階級分野の利益がどう衝突していたか、その内部矛盾を含んだまま「近代国家への脱皮」に移った明治の過程が重大なであると説く。松方財政の解釈についても譲らず、その根拠として板垣退助編の『自由党史』を挙げ、「岩倉、山縣あたりの『狙い』を引き出すのは歴史上の解釈である」と論じ、「松方側の見解は『別の側面』としている。最後に、挑発には挑発でと言わんばかりに林の見解を『新『皇国史観』』とした上で、林が転向後、戦時中に満州国運動、汪兆銘政権運動に積極的につなげていたころの狂信性をまたここに見るような気がすると結んでいる<sup>45</sup>。

この個人攻撃に対して林は次のように弁明している。

「私が昭和十五年に満州国成立を描いた『青年の国』は真相を書きすぎたという理由で発禁され、汪政権の設計者たちは私がこれを偽政権扱いするという理由で強制送還の船室まで用意した。私は南京から北京に逃げて助かった。これが『史実』だ」。

十日後の六月二十二日、清張が林の再反論に応答している<sup>46</sup>。林への個人攻撃も緩めることなく、林が強制送還されなかったり、南京から

北京に逃げた話は自分にとって初耳だと書き、それほど非協力的なら林の回想記に特筆すべきであったとあくまで追及する。そして、「それが『史実だ』と言いつけるためには、その実証を上げる必要がある」という挑発的な言葉を残して論を締めくくっている。

この論争は清張にとって相当に大きな意味を持つものであった。なにしろ、かれは九月になっても、『現実と文学』誌上で振り返っているからである<sup>47</sup>。そして、この論争に際して、清張自らが発した「実証」という言葉こそ、その後のかれの作家人生に大いに影響を及ぼした言葉であった。事実、その後に執筆した『昭和史発掘』の二・二六事件の叙述は、実証的態度が貫かれている。『昭和史発掘』の中で「私は自分の意見はあまり挿入していない。できるかぎり客観性を失わないようにし、面白くないことを承知で資料をもって語らせるようにして、筆が恣意な叙述や『描写』にわたることを避けた<sup>48</sup>」と述べているのも、また久野収との対談で、「要するに実証が足りないんです」、「実証性が足りない」というのは、著者をよく読んでいないということ<sup>49</sup>と話しているのも偶然ではない。

「実証」という言葉に加えてもう一点注目すべきは、清張が自らに寄せられた批判の中でも第一の点、すなわち「俗論」とされた天皇論には沈黙しているという点である。この沈黙の意味は、『火の虚舟』の書評への反論と比べてみると、実に明快になる。なにしろ、一九六七年七月から八月にかけて読売新聞紙上でなされた論争において、清張は批評家山本健吉の論点の一つ一つあますところなく答えているからである<sup>50</sup>。林の論点に対する沈黙の理由は、おそらく清張自身も自らの天皇論を実証すべきとの考えに至っていたからではないだろうか。たしかに、

『象徴の設計』は天皇神権説の起源を描いてはいるが、これが歴史の中でどのような働きを持ったのかという点までは視野に入っていなかった。本当の意味で天皇制を批判するのならばこの問いに歴史叙述で答える必要がある、そう清張は考えた。

このような観点に立って、『象徴の設計』、『昭和史発掘』、『北一輝論』の内容を検討してみれば、天皇制への批判意識が通奏低音として流れていることが分かる。そして、いみじくも歴史小説的文体を採用していた『象徴の設計』に対して後の二者は歴史評論の体裁をとって叙述により客観性を持たせているところからもこの推論は裏付けられる<sup>51</sup>。

清張を近代日本史へといざなうきっかけとなった『象徴の設計』は、天皇神権説の形成過程をたどる作品であった。

軍隊が藩兵意識から抜け切れずに精神面において国家への忠誠の欠如を懸念する山県有朋が天皇を神格化して軍隊を統率するという着想を抱き、それが実現するまでの顛末が語られている。まず、山県がその着想に至ったくだけりを見てみよう。

「天皇を兵卒の忠義信仰の対象にするなら、この関係を直接的な結びにしなければならぬ。そこにおいて初めて中間の『政府』が消失して『天皇』に対する恩の観念が生まれるのである」……中略……

直接的な従属関係を形成するには、天皇が軍隊の直接上官のかたちにしなければならぬ。要するに、封建時代の君主と家来の単純明快な関係に戻すことだ。山県は眼から鱗が落ちたような心地がした。

もし、天皇を軍隊の最極限に置くとすれば、天皇が宗教的な性格にならなければ弱くなる。キリスト教の『神』がここにおいてそのまま日本的な神格化に置替えられるのである。天皇の人格を神にまで形成さ

せることである<sup>52</sup>。

このような展望のもとに創り出されたのが『軍人勅諭』であり、清張はこの中で使われているレトリックを浮き彫りにする。清張によれば、「朕は汝等軍人の大元帥なるぞ」といきなり大喝し、息もつがさず天皇が「頭」となって軍人たる「四肢」と直結することを宣言しているのだ<sup>53</sup>。これによって軍隊は幕藩体制期の君主によってなされたのと同様に殉死をも強制される。すなわち、形式上は天皇が軍隊を私兵であるかのごとく直接指揮する。ただし、実際には参謀本部長が、陸軍卿の上奏を経ずに直接天皇に発言し影響力を行使する<sup>54</sup>。

この体制の強化のためになされた歴史の歪曲を清張は暴露する。たとえば、天皇の詔勅に見られた「遺烈」という言葉を取り上げ、これは歴史性を無視するか歪曲した表現であると批判し、日本史を調べてみれば、天皇は幕府によって屈従されてきたのであって「遺烈」どころではないと論じる<sup>55</sup>。

他方、天皇の神格化に貢献したもう一人の人物の名を挙げる。岩倉具視である。かれは天皇を神の座に据えることにより明治政体の基礎固めをし、祭政一致を宣伝する。天皇が神格化されれば、これを冒読するものには不敬罪が科せられる。天皇に対する崇拜の念を植え付けるために『教育勅語』がつけられた。こうして、天皇は軍人ばかりではなく、日本国民の頂点に位置する存在とされたというのである<sup>56</sup>。

ならば、このような近代日本の体制を変革する可能性はなかったのか、あるいは少なくとも全体主義化を阻止することはできなかったのか、というのが素朴に湧いてくる疑問である。清張は『昭和史発掘』を連載しつつも六五年には『小説東京大学』（単行本化に際しては『小説

東京帝国大学』と改題）、六六年には『火の虚舟』を書いている。

これら二著は先に挙げた『象徴の設計』、『昭和史発掘』、『北一輝論』とはいささか関心の方向が異なり、権力側ではなく、権力に批判を加え必要によっては方向転換を迫るべき知識人に光を当てている。

しかし、清張の筆致は総じて厳しい。まずもって、東京帝国大学という機関そのものの限界に触れる。清張は大学創立の立役者森有礼の考え方を引用して、帝国大学は元来国家のための人材を育成するための機関であり、その教育思想は「憲法制定と照応した絶対国家主義」であったとしている<sup>57</sup>。論理的帰結として学問の上から天皇の意義が論じられないのであった。清張は登場人物奥宮健之の言葉を通して、帝国大学教授が議員や官僚の職を兼任していた事実（穂積陳重、菊池大麓、鳩山和夫、田尻稻次郎など）を指摘している。加えて、近代日本の官僚登用制度もまた十分に開かれてはおらず、実質的には官僚任用試験員の講義を直接聞いておかなければ口頭試問に通ることは困難であったと述べる<sup>58</sup>。そのうえで、これらの事実の背後に横たわる根本問題を説明してみせる。

「帝国大学の経営が国家予算で賄われている以上、どこに真の意味の『大学の独立』があり得ようか。教授が官吏である限り、どこに『学問の自由』があるうか。ひとたび、それが国家の利益、政府の方針に相反したときは干渉を受けるのは当然の話である。だからこそさきに久米邦武が『神道は祭天の古俗』筆禍を蒙り、講壇から放逐されたのだ。たとえば、伊勢神道一派の策動はあったにしても、久米は皇室の尊厳を傷つけたのである。だが、この時はほかの教授は『戸水問題』ほどには久米を庇わなかった。彼らは久米を見殺しにした。なぜか。

要するに、それが一步間違えば不敬罪を成立することに教授たちも気づいていたからである。もし、真に『学問の自由』を唱えるならば、同僚教授がこぞって久米を擁護しなければならぬ。なぜなら、久米の右の論文は学問上のことであり、純粋な論攷だからだ。それを傍観して何もしなかったのは帝国大学教授たちが久米の論文が国家の利益に反していたことを狡猾にも心得ていたためである<sup>59</sup>。

大学教授が発言や行動において限界を持たざるを得なかったのだとしたら、大学外にいた知識人はどうだったのか。いみじくも清張が次に取り組んだテーマは中江兆民（篤介）という最もラディカルな思想家であった。なるほど、清張は兆民の思想が変質しなかった原因を、かれが「土佐出身でありながら板垣グループとはうまくいってなかった<sup>60</sup>」事実に戻している。政治的行動に移ることが出来なかったがゆえに兆民は自らの思想を貫くことが出来たというわけである。ここにも書き手の受ける経済的・政治的圧力に対する清張の批判的眼差しを見て取ることが出来る。

自由民権運動における兆民を右のように位置付けた清張は兆民の思想を、民主主義的な立憲政体を理想とし、政府の横暴に対しては暴力も辞さないものであったと規定する<sup>61</sup>。そして、議会に対する考えにも言及する。清張にしたがえば、兆民は議会において天皇制を廃止し、共和制を設立する自由を議会に与えるべきと考えていた。この点にこそ、上から与えられた議会を人民のものにしようとする兆民の「議会闘争的な姿<sup>62</sup>」があった。

以上のように清張は本作前半において大いに兆民を礼賛するのだが、後半ではかれの挫折と苦悩を大きな共感とともに描いていく。清

張はたとえ偉大な思想的業績を残したとしても、社会の中で生き絶望せざるを得なかった現実を、兆民の汚点と目されている後半生の描写を通じて読者にまざまざと見せつける。それを、清張の言葉によってではなく、文字通り兆民の言葉の書かれている史料を引用することによって見せつけるのである。

「金無くしては何事もできないのだ。自分のように日々衣食に奔走している者には雄編大作ができるはずもなし、泰西の文人のように僅か一、二作の傑作を出せば忽ち数万部を売って、一生悠々と文を作る余裕があることも不可能である。わが小島国のように限りある読者を相手とし新聞、雑誌に文を売り、その日暮らしを立てる者に何が出来るようか。文字は贅沢品である。衣食足つてのち談ずべきことである。金だ、金だ、おれは金儲けをするぞ<sup>63</sup>」。

清張は、兆民が藩閥と政商が結託して住民を搾取している現実に憤激したが、それでも自分が商人になると決めた以上は、この現実を目を閉じなければならなかったと述べ、この決断を「藩閥政治攻撃の闘士中江兆民の仮死」と呼ぶ。「彼は迷ったでしょう。そして懊悩の末に選んだのが仮死です<sup>64</sup>」と深い同情を寄せながら付言する。

さらに、清張は大学やその外の知識人だけでなく新聞さえも十分な権力批判ができなかった事実も指摘する。

「戦争に反対する新聞は一つもなかった。国民は何も新聞からは知らされなかった。二・二六事件で、朝日新聞社は反乱軍に襲撃され、他の新聞社ではトラックが来た時万歳を唱えたのがあった<sup>65</sup>」。

以上見てきたように、清張は近代日本の言論界と大学の無力を批判する。一方で、清張自身の生活経験とはかけ離れた高度に政治的な世

界を描いた。清張の担当編集者であった藤井康栄が指摘するように、それは自分が苦しく生活していた時代を、より立体的に把握しようとの試みであった。「身辺的昭和史」(一九七一年五・六月)に次のような記述がみられる。

「山県の死と同じ年に、彼のあとを追うように森鷗外が死んだ。山県も大隈も八十三歳、鷗外は六十だった。昭和に入ってから二年、芥川龍之介が前途に『漠然たる不安』を抱いて自殺した。鷗外の死の報道は記憶にないが、芥川の死はショックだった。これも大正の死である。三年、共産党員検挙の三・一五事件が起こり田中内閣によって治安維持法に死刑と無期が追加される。その翌年四月に四・一六事件が起こり、その余波で私も検挙された。―昭和がはじまった<sup>66)</sup>」。

ただし、全てが松本清張個人から出発していたと考えてしまうと間違いを犯す。彼自身が「いわゆる私小説というものは私の体質に合わないのである」と告白しているように、清張の執筆動機には私小説的な意識は薄い<sup>67)</sup>。むしろ、歴史を現代社会を読み解く参照点にしようとする意識のほうが強い。現在と過去を常に行き来しながら論じるスタイルは『現代官僚論』(一九六三年)のころから一貫している。「新権力論」(一九七一年一月)と題されたエッセイの一節を引いてみる。

「明治の絶対体制秩序は官僚を中核として揺るがなかった。官僚は特別な階級によって構成された。その体制秩序のなかで貧窮の庶民に『出世』の機会が与えられるわずかな救いが残されていた。軍人になることと政治家になることだった。陸海軍大将の実家が貧農というのはザラにあった。官費で幼年学校、士官学校、陸海軍大学に進学できるからだ。また政党はなやかなころは大した学歴がなくとも大臣となるの

もそう難しいことではなかった。これが明治以来の絶対秩序の重苦しい中でわずかな緩衝の役になっていたことは否めない。

しかし、現在は軍人はもとより政党政治の事実上の終熄と、官僚の政界選挙により、ある意味でその緩衝器はとりはずされたといえる。現在は国民の頭が押さえつけられて息抜きのできない時代といつてよく、若年層に反抗のエネルギーが鬱積して暴発するのも理由のないことではない<sup>68)</sup>」。

清張の近代史にこだわった最大の理由は、自らの半生を苦しめていた昭和という時代を描き、その原因を一つの物語として、当時の日本に生きた人々や後世の人間と共有したいとの思いであった。昭和の苦しさの諸原因の中でも、とくに天皇制の問題が強調されている。『昭和史発掘』終了後も、かれは史料の収集と研究に努めて、その起点を解明しようとしている。その到達点の一つが『万世一系』天皇制の研究』(一九七一年)である<sup>69)</sup>。ここで清張は林との論争で答えなかった諸点に明快な応答をしている。この論考は天皇家の歴史を古代から叙述していき、その存続の理由を明らかにしようとする。清張によれば、その理由は二つあった。

第一が近親血族主義である。いかに強力な権力を持つものが出現しても血縁外であれば天皇になることができない。しかもこの血統主義は、天皇の下にいる貴族、武士にも一貫していた。このように社会構造自体が血統主義により成り立っていたと清張は論ずる。

天皇家存続の理由の第二は、実質的な政治権力の委任ということであった。天皇は政治の実権を時代時代の実力者に譲ること、現実政治の不平不満を直接蒙る必要をなくしていたという。

以上の理由から、明治以前には天皇は存在はしていても被支配民から支配者としてほとんど認識されていなかった。それが明治になると伊藤や山県によって人格化された清張は推測する。ただ、人格化の時期や関わった人物の具体的な役割などを資料に即して説明することはいまだにできてはいなかった。たとえば、『清張日記』の一九八〇年十一月三十一日には明治憲法関連史料を参照し、その「日本国憲法按」には「未だ『天皇』も称号を用いず、『皇帝』は Emperor の直訳<sup>70</sup>」とのメモを残している。翌年の一月五日には次のような記述がある。

「天皇の神権化をだれが主となって推進したのかはよくわからない。その権威化される前は維新後間もないことでもあり、君臣の間はあたかも友人の如きであったという（側近・山岡鉄舟の回顧談など）。天皇の神権的絶対化は岩倉具視が国内統制のために考え、道徳的には元田永孚<sup>なぶぐね</sup>などが行ない、『富国強兵』的には山県有朋などが補強したと思われる<sup>71</sup>」。

また、『史観宰相論』においては『象徴の設計』以来清張の関心の中心を占めてきた天皇神権説の法的な根拠にも触れている。清張は明治憲法の第十一、十二条を伊藤の手になる「憲法義解」と対照させ、軍が伊藤の意に反して「帷幄上奏」のために利用することになる曖昧な箇所を説明している<sup>72</sup>。

さらに、一九八九年には清張による天皇論の決定版ともいえる「人格天皇の孤独」が発表される。このなかで清張は『昭和史発掘』の重要な箇所を引きながら、明治以降の天皇とその周辺の権力関係を描いている。天皇制はあくまで十分な輔弼があつてこそ機能しうるものだが、明治天皇と比して昭和天皇は、ことに昭和十三年以後敗戦まで孤

独であったとする。しかし、「天皇の軍事面での責任はたとえ統帥権が形式化したとしても、立憲君主の国務面の責任よりも重要といわねばならない」と論じる。なにしろ、統帥権は内閣から独立して天皇に直屬していたのだから。こう論を進めたうえで清張は問う。「昭和天皇は軍その他に対して全く無意志だったのだろうか」と。ひるがえって、国民に眼を向けたとき、清張の見るところ、大部分は軍部に批判的であった。

「赤坂一帯を占拠した決行部隊の栗原中尉あるいはその下士官などが、群衆に向かつて『昭和維新の精神』を演説したが、遠巻きにした群衆はただ黙々と聞いていただけであった。この姿が民衆の無言の抵抗であった<sup>73</sup>」。

清張は天皇制という根本問題に加え、歴代の指導者や社会で重要な役割を担うべき言論界が決定的な局面で間違つたと考えた。事実、これはそのような局面を一つ一つ取り上げて批判的に論じている。

林との論争で沈黙せざるを得なかつた問題を一連の日本近代史論執筆後においてもなお考えようとしているところに清張の問題意識の深さを読み取ることができる。

以後も近代日本への関心は継続する。一九八五年八月五日の日記には明治維新のきわめて重要な一側面を抽出する記述がある。

「明治の官僚支配も封建制の引継ぎとあまり違わないところがある。将軍家が天皇と代り、大老が元老（主として山県有朋）となり、御用部屋が内閣と変わった如きである<sup>74</sup>」。

じつのところ、天皇制とともに清張が批判しようとしたのはこのような日本社会に延々と続く官僚的支配体制であつた<sup>75</sup>。

官僚制については、清張は一九六三年の『現代官僚論』以来長らく注目し続けてきていた。この本において、かれは、戦前の官僚制度の沿革についても触れ、日本におけるエリート偏重を批判している<sup>76</sup>。そして、『史観宰相論』（一九八〇年）では、より長期的な視座に立った官僚論が展開され、一つの結論に達している。宰相の「死活」を操ってきたのは官僚であり、実はその制度は明治政府が採用した古代の律令制であり、当然、その頂点には天皇がいた。しかも古代の各官名は「秀吉のころから徳川幕府を通じて存在していた」のである。次のように締めくくっているのも偶然ではない。「この『宰相論』を書いて想うことは古来から結合においては部族的、政治においては官僚政治であるという帰納である<sup>77</sup>」。

この官僚制の特徴を、「私観・昭和史論」（一九八八年）で補完し、その「集団制」に注目している。すなわち、官僚はそのポストにいる限りの責任を持つが、ポストが変わると引き継いだきりそれ以降そのポストの仕事に関わらなくなるため、責任の所在が不明確になるといえる<sup>78</sup>。

#### おわりに

清張は『象徴の設計』で打ち出したテーゼをより実証的に解明すべく、時に天皇、時に天皇周辺の政治家、そして政治的枠組みの外にあった個人及び民間団体へと視点をたえず移動させることにより、当初の史論への確信を深めていった。その結果たどり着いたテーゼは、昭和という時代の苦しみの原因は明治に構築された天皇神権主義とそれ

を支えた官僚制にあり、これらに抵抗しようにも、知識人は及び腰であったし、民衆も絶えず抑えられ続けた、というものであった。一九六二年の『象徴の設計』から数えれば、八九年の「神格天皇の孤独」に至るまで、実に一七年にわたる月日を費やしての追記及び補完を繰り返した末の結論である。

近代以降の言論界と大学が天皇制なり、歴史なりを自由に論じることができないうのだとしたら、ナショナルな意識から自由でいて、むしろ近代国家の中で塗炭の苦しみを味わい、今や言論界の中核にいてもいってもよい自分こそが、社会や政治の批判を行わねばならない責任があるのではないか、清張は感情によってではなく、あくまで理性的に考えていき、このような結論に至ったと思う。そして、試行錯誤のすえに行きついた手段が歴史叙述であった。半藤一利は清張の言葉を引用している。

「小説で書くと、そこには多少のフィクションを入れなければならぬ。しかし、それでは、読者は、実際のデータとフィクションの区別がつかなくなってしまう。つまり、なまじっかフィクションを入れることによって客観的な事実が混同され、真実が弱められるのである。それよりも、調べた材料をそのままに並べ、この資料の上に立つて私の考え方を述べた方が小説などの形式よりもはるかに読者に直接的な印象を与えらる<sup>79</sup>」。

そのうえで、半藤は言う。

「清張さんの『底辺からの視線』とは、ことさらに意識していることではなく、その人間観、社会観、つまりは歴史観から発する本当のリアリストのそれといった方が正しいと考えられる<sup>80</sup>」。

筆者もこの考えに同意する。もつといえ、この清張の深いところにあるこの歴史観そのものに林房雄が触れたからこそ、ならば近代史を書いて実証してやろうという思いになったのだと考える。この思いの先に『昭和史発掘』が、そしてその中に、半藤がいみじくも指摘した、「歴史の裏面の真実に、正面から取り組んで、一所懸命に解明しようとしている、『清張さんの真摯な、屈せざる、物書き魂』<sup>81</sup>」が生きている。そしてこの「歴史の裏面の真実」に関して、清張は歴史小説とは何かについて次のように語っている。

「史実の下層に埋没している人間を発掘することが、歴史小説家の仕事であろう。史実は結局は当時の人間心理の交渉が遺した形にすぎない。だから逆に言うと、歴史小説は、史実という形の上層から下層に掘られねばならないことになると思う。歴史小説と史実が離れられないゆえである<sup>82</sup>」。

最後に、清張の政治思想の表出であり政治実践ともいえる『昭和史発掘』は果たしてかれの意図通りになったのかを検証してみよう。『昭和史発掘』の意義を、同テーマを扱った書籍群の中に位置付け、検討してみたい<sup>83</sup>。

筆頭に挙げられるべきは木下半治（一九〇〇・一九八九）の実証研究『日本國家主義運動史』（一九五二年）である。木下は國家主義的な団体の離合集散の動きを丹念に追い、第一次大戦後から二・二六事件以後までの政治の流れを通史として描いている<sup>84</sup>。出来事の推移と史料の転記という記述方針はおおむね清張にも踏襲されている。この先行研究に敬意を払いながらも清張は、新史料を用いて描き、文壇、言論界、アカデミズムといった文化世界と政治世界との関係を加えたという

点で歴史叙述をより豊富なものにしていく。

思想的な作品としては戸坂潤（一九〇〇・一九四五）の『日本イデオロギー論』（一九三六年）がある<sup>85</sup>。この書の補足で語られる「立憲的ファシズム」の分析は秀逸であり、国民に実際上の政治体制も、その支持母体も、見せない形で進化した日本の軍国主義化については清張も同意見であったはずである。

つづいて、丸山眞男（一九一四・一九四五）の「超國家主義の論理と心理」（一九四六年）を中心とした諸論考との関係について触れておこう。この論文における有名な命題に、清張はおそらくは同意したことだろう。その命題とは「國家的社会地位の価値基準はその社会的職能よりも、天皇への距離である」というのがそれだ<sup>86</sup>。ただし、天皇制を日本国民一般が内面から支持していたかという点については留保したのではない。また、丸山が「下剋上<sup>87</sup>」と表現した日本社会の風潮を、清張はより明確化し、陸軍の將軍たちと青年將校らの間にある差別構造を明らかにし、この構造を天皇制という枠組みの中に置いて分析している。

つぎに、丸山を批判した橋川文三（一九二二・一九八三）と清張の関係はどうであつたらうか。橋川の業績で注目しに値するのは青年將校の感情面への理解である。橋川は「使命感の優越と、多感な激情性と、非日常的思考<sup>88</sup>」と規定している。これにも清張は、基本的に同意したであろうが、やはり保留は付けたかもしれない。のちに藤原彰（一九二二・一九四九）が明らかにしたように<sup>89</sup>、清張は二・二六事件に参加した人々の情念と、軍隊内部の人間関係を詳細に追っており、十把一絡げにはできないとの思いが強かつたはずだからである。同時代人への思

い入れはあつたにしても、だからといってかれの批判は弱められたわけではない。清張は青年将校たち個々のテロリズムへの意思を検討していき、法的責任にまで思索を拡げている。加えて、橋川は「国民の天皇」の下に平等を追求した「昭和維新」運動の重要性を指摘する<sup>90</sup>。民間右翼団体の意義は清張も強調するところであり、いわば丸山の不十分であった叙述を橋川、清張はそれぞれの立場から批判的な展開をしたと言える。

次に、一九三〇年代生まれの著述家たちの作品と比較してみよう。

半藤一利（一九三一）は『昭和史一九二六・一九四五』を発表している。この作品の物語構成、史論はほぼ清張のそれを踏襲していると思われる。

半藤の叙述は、清張の読者に対して相当の負担を強いる『昭和史発掘』と対照的に平易であり、内容においてもマスコミが日本のファッショ化に果たした役割にかなりのページを割いている<sup>91</sup>。

半藤と同様に作家として昭和史を書いた人物の中には保阪正康（一九三九）がいる。保阪は丸山と橋川の論争に積極的に参与する。保阪は橋川の考えに沿いながら、上からのナショナリズムと下からのナショナリズムをつなぐものに光を当てる<sup>92</sup>。かれは、下からの自然なナショナリズム——ここでは近代以前の日本の共同体で生きてきた人々の知恵の集積と規定されている<sup>93</sup>——が上からのナショナリズムの言説に「共鳴」することによって、ファシズムが推進されたとの説を提示する。そして、叙述の中に大正以後のナショナリズムの変容というアカデミズムの蓄積を盛り込み、清張による磯部手記解釈へ異論を唱える<sup>94</sup>。いずれの作家も、アカデミズムの外に自らを置き権力を批判してい

く姿勢を貫いた清張へ敬意を払いながら、かれの意思を継承して昭和史を叙述している。

かれらと同世代の学者たちと比較すると清張の問題意識は明瞭になる。たとえば、秦郁彦（一九三二）の『軍ファシズム運動史』（一九六二）は二・二六事件前後の各事件をくまなく取り上げ均整のとれた通史的記述になっている。この作品に比すと清張の『昭和史発掘』は、二・二六事件以前は社会の雰囲気などをより広い視野でとらえているものの、クライマックスといえる二・二六事件自体は徹視的に叙述している。清張の意図はあえてこのような書き方をするので、二・二六事件以後はファシズムを止める手だてがきわめて限定的であり、歴史から効果的に学ぶには、この事件にいたる過程を追うことに尽きると主張する点にあった。かれは二・二六事件以前にいくつも日本のファッショ化を止める契機があつたことを指摘し、その後もこれらの諸契機を繰り返し強調している<sup>95</sup>。また、清張はある講演で『昭和史発掘』のクライマックスを二・二六事件にした理由を語っている。

「わたしが特に二・二六事件に重点をおいたのは、ああいう武力クーデタは今後もまた起るかもしれない、現在は軍隊と同じものがあるから同じものがいつくりかえされるかわらないという懸念からです」<sup>96</sup>。

徴兵制度をいきなり布くとなるとこれは大問題であります。大騒動になります。だから徴兵制度になつてもやむをえないと国民が考えるような状態を作る、つまり謀略というものが行われるかもわかりません。そういう可能性をわれわれは考えておかねばなりません<sup>96</sup>。

最後に一九四〇年代生まれの研究者たちの手になる、いくつかの注

目すべき作品を『昭和史発掘』と比較してみよう。かれらは、清張の遺産を受け継いで二・二六事件の経過と意義をより鮮明にしている。

はじめに挙げておきたいのが筒井清忠（一九四八）の『二・二六事件とその時代』である。登場人物たちの思想と行動の結びつきのメカニズムを追った意欲作だが、なかでも興味深いのがその第二章である。大変分析的なこの章は、一九二〇年代から四〇年代の日本の政治社会を支えた諸勢力を的確に区分しつつ、それらの競合のなかから結果的に陸軍総力戦派と革新官僚が台頭し、権力の中樞を担うようになるという流れを説明している<sup>97</sup>。

筒井は二・二六事件の経緯をまとめているが、その際に利用している文献の中に『昭和史発掘』がある。実証という観点で、清張はアカデミズムから一定の信頼を獲ち得ていた<sup>98</sup>。さらに、この作品の続編ともいえる『一・二六事件と青年将校』では、青年将校たちの裁判過程の問題点に触れているが、これも清張の解釈を確認している<sup>99</sup>。

次に触れたいのが須崎慎一（一九四六）の『日本ファシズムとその時代』である。かれは本書の冒頭で、軍部が台頭し政治をも左右した昭和の政治体制をファシズムと呼ぶか否かを検証し、やはり「ファシズムとよぶしかない」との判断を下している<sup>100</sup>。ただそのファシズム化の過程は、民間右翼団体も含むファシショ団体の合従連衡のなかで軍部が主導権を握るようになったが、それは大衆的基盤なき運動であったと論ずる<sup>101</sup>。そうした軍部が「自由主義の台頭」を前に行き詰まりを見せ、現状打破のために青年将校を利用したのが二・二六事件であったと規定する<sup>102</sup>。この考えは清張のそれと一致するし、かれの編さんした史料を須崎が自分の主張の重要部分を支えるものとして引用してい

ることもまた、清張の影響の大きさを物語っている<sup>103</sup>。須崎はまた、『一・二六事件 青年将校の意識と心理』でも、第一師団の満州派遣と相沢事件が青年将校を後押ししたという点で清張と同意見に達している<sup>104</sup>。

以上、松本清張は学界、言論界において昭和史学史に十分な貢献をなし、かれの意志を継ぐ書き手にも恵まれた、と結論することができる。

## 注

- 1 二人の対談は『文学と社会 松本清張対談集』新日本出版社、一九七七年一九三・二五二頁参照。司馬遼太郎に関して清張は「彼とほくとの根本的な違いは、彼はやはり歴史上の人物を素材として書いているわけね。で彼は、人間が面白くてしょうがないというイミのことを書いていたけれど、僕はそういうことには興味がない」とコメントしている（森本哲郎「火を追跡する作家」『文藝春秋』臨時増刊、一九七一年一二月号、一八八頁）。この点は、半藤一利『清張さんと司馬さん』文春文庫、二〇〇五年、第六章、辻井喬『私の松本清張論―タブーに挑んだ国民作家』新日本出版社、二〇一〇年、第九章、第一章、第二章を参照。
- 2 先行研究には、半藤一利『清張さんと司馬さん』前掲、第九章、牧俊太郎『松本清張 「明治」の発掘―その推理と史眼』風詠社、二〇一五年がある。
- 3 小森陽一＋成田龍二「松本清張と歴史への欲望」『現代思想』二〇〇五年三三―三三卷、六六・八九頁。ちなみに、成田龍二『近現代日本史と歴史学』中公新書、二〇一二年には清張の『昭和史発掘』は記されていない。
- 4 藤井康栄『松本清張の残像』文春文庫、二〇〇二年、八八・八九頁。
- 5 保阪正康『松本清張と昭和史』平凡社新書、二〇〇六年、三七頁。
- 6 『昭和史発掘三』文藝春秋、一九七〇年、五八頁。
- 7 とはいえ、実際のところ、青年将校は共産主義を信奉していたわけではない。かれらの行動指針ともなった北一輝の著作『日本改造法案大綱』について清張は次のように述べる。  
「彼の考えは一切の私有財産を否定する共産主義でもなく、また私

有財産形体を最終的のものとする資本主義のそれでもなく、私有財産の量に一定の限界を加え、その余剰を国家の帰属にするという国家社会主義的な考えに近い」。

共産主義運動が労働者や農民の解放と革命を指向していたのに対し、青年将校運動は天皇の下にある重臣層・政党・財閥を排し、軍部を媒体として天皇と国民を直結させる「天皇親政」を目指したとされる（前掲書、第八卷、二二九頁）。

天皇の「股肱」（「軍人勅諭」たる軍人は天皇の「思召に叶う」と思われることなら何をやってもいい、という独善的な思考になると論じられる。それに対して天皇はむろん同意するはずがない。清張は、天皇は天皇制が重臣層、内閣、政党、資本主義経済などのあまたの体制に「十重二十重と圍繞されていなければ存続は困難である」ことを感得していたと述べる。にもかかわらず、青年将校たちの独善は北の『日本改造法案』で正当化され、具体的革命プログラムと結びつく（前掲書、第八卷、二四三頁）。

この本の中で北は天皇の大権によって三年間憲法を停止し、全国に戒厳令を敷くべきとする。その間に国家改造内閣をつくり、軍閥、史閥、党閥の人々を斥けて全国よりひろく偉材を集めて閣員に招く。この実行にあたるのが「在郷軍人会議」である。清張は、北の言う在郷軍人会議とは、実際上は現役軍人団を指しているのであって、北は明言を憚って在郷軍人会議としたとの説を紹介し、これに合意している。

青年将校たちがこのような政治プログラムのために起こす事件に

裁判所も陸軍も同情する。かれらの行動は間違っているとしても、動機は天皇への忠誠という純粹なものとされたからである。このような意見は世間も共有していた(前掲書、第四卷、三二四頁三二六頁)。

北の聡明さを認めつつも清張は『国家改造法案』の矛盾を突く。

「天皇は雲上にあつてこそ神格化されるが国民の総代表としての一員になつてしまえば、現人神ではなくなつてしまふ。」「天皇大権とは神格化された天皇によってのみその威令が可能なのであつて、国民の総代表なればその神秘的な絶対君主の立場は喪失する。いまさら『天皇大権』を叫んだところで權威のない空疎な響きしか持ち得ない」。

なるほど、この天皇大権を実行するのが在郷軍人団ということになる。ところが、体制を天皇の名の下に破壊したあとに他の政治諸団体と切り離された在郷軍人団がいかに「偉材」を集めようとも軍部独裁に至るはずだと清張は見る(前掲書、第八卷、三〇七・三〇八頁)。

さらに、行動計画の段階にも無理があつた点が指摘される。第一に、軍隊は明治以来、私兵化を防ぐために統帥権を頂点としたタテの命令系統が整備され、反対にヨコの連携が排除されていた。にもかかわらず、この弱いはずのヨコの連携に期待が持たれていた。第二に、民衆の参加が十分に考慮されていなかった(前掲書、第八卷、三二三・三二四頁)。

<sup>8</sup> ただし、清張は司法がギリギリのところでのその独立を維持しえ、天理研究会の強力な宗教心が戦前において様々な圧力に屈しなかった事実も付記している。むろん社会が常に国家と対立するわけではないということも清張も自覚している。軍国主義化に貢献したであろう宗

教団体、大本教は満州事変後、教主出口王仁三郎が「昭和青年会」を組織したところから、私兵集団化した事実も物語る。もともと大本教の持っていた「世直し」的なイデオロギーが軍人たちにも受けて、昭和九年、新たに「昭和神聖会」も立ち上げられた。この動きに政府はもろろ無関心ではなく、二・二六事件直前にすでに弾圧の手はずは整えられていた。結局、この弾圧は二・二六事件の発生により実行されずに終るが、大本教の問題は社会の両義性と国体明徴運動が単なる政治上の問題ではなしに、社会の深部まで根をはるものであったことを示唆している(前掲書、第九卷、一八〇・一八四頁)。

<sup>9</sup> 前掲書、第六卷、八頁。

<sup>10</sup> 前掲書、第六卷、一〇六頁。

<sup>11</sup> 前掲書、第六卷、七四頁。

<sup>12</sup> 前掲書、第六卷、一一八頁。

<sup>13</sup> 前掲書、第六卷、一一〇頁。

<sup>14</sup> 前掲書、第六卷、二二五頁。

<sup>15</sup> 前掲書、第六卷、二二八頁。

<sup>16</sup> 前掲書、第七卷、二二三・二三四頁。

<sup>17</sup> 前掲書、第七卷、二八二頁。

<sup>18</sup> 前掲書、第七卷、二・一二頁。

<sup>19</sup> 前掲書、第十卷、三二九・三三〇頁。

<sup>20</sup> 前掲書、第七卷、一三九・一四〇頁。

<sup>21</sup> 前掲書、第十一卷、二六五・二六七頁。

<sup>22</sup> 前掲書、第十三卷、九八・九九頁。

<sup>23</sup> 前掲書、第十一卷、二七六・二七七頁。

24 前掲書、第十卷、二六〇・二六一頁。注目したいのは清張が、この二・二六事件を終局に導いた戒厳令について立ち入った議論をしていることである。それは以下のようにまとめられる。戒厳はそもそも敵の侵略の危機に直面した場合にあるものだから、平時に戒厳を発令する意味はなく、その場合は戦時警備令の適用で十分である。実際に、当時川島陸相、大角海相、後藤内相のいずれもが戒厳の発令には反対を唱えていた。この意味で、青年将校らが実行に移そうとしていた戒厳下における国家改造は戒厳令自体の意味を拡大解釈する必要があり、この点において北の方針は十分ではなかった。しかも、当の北は決起将校らが民衆と接点を欠いていたことや組織が不完全であったことを見抜いて失敗を予測し、自らの権威で真崎を長に据えるよう磯部に助言していた(前掲書、第十一卷、六七・六八、一七五・一七六頁)。

25 前掲書、第十二卷、三五頁。

26 前掲書、第十二卷、四七頁。

27 前掲書、第十二卷、七五頁。

28 前掲書、第十二卷、九六頁。

29 前掲書、第十二卷、二四五・二四六頁。

30 前掲書、第十二卷、二五五頁、第十三卷、一六六・一六七、一七二、一七六頁。

31 前掲書、第十三卷、四〇頁。

32 前掲書、第十三卷、二三三・二三四頁。

33 前掲書、第十三卷、二三六・二三七頁。

34 前掲書、第十三卷、二四四・二四五頁。

35 前掲書、第十三卷、二五九頁。

36 筒井清忠「北一輝と二・二六事件をめぐる想像力と真実」松本清張『北一輝論』ちくま文庫、二〇一〇年、四〇四頁。

37 松本清張『北一輝論』前掲、一六二頁。

38 前掲書、五四頁。

39 前掲書、七〇頁。

40 前掲書、九三・九四頁。

41 前掲書、二六・二七頁。

42 前掲書、一一九・一二〇頁。

43 前掲書、一三四・一三五頁。

44 同様の論争は大岡昇平との間にもすでに生じていた。この辺りの事情については半藤一利『文士の遺言―なつかしき作家たちと昭和史』講談社、二〇一七年、第三章に詳しい。

45 清張の反論の五日後の六月十二日、林が「やっぱり『偽造だ』」とのタイトルの下、朝日新聞に再反論を載せている。この中で林は「民」と「官」の協調の例として、板垣退助や河野広中の「転向」、伊藤博文との「妥協」、自由党員の「大アジア主義」への急転回を挙げている。松方財政の解釈については、清張の挙げた『自由党史』は党派的性格が強く「歴史の偽造」を平然と行うたぐいのもので史料と扱うのは軽率だと反論する。

46 まず、明治期における「民」と「官」の関係をめぐる問題について、「板垣が明治十八年に政治家から出た金で洋行して以来の『転向』は、政府に買収されたからである」とし、「買収とは『目標の同一性による妥協』ではない」と論じる。また、板垣が伊藤博文に降参したのは、松方デフレによる農村の貧困激化によって運動資金の基盤を失ったからだ」と

説明する。

次に松方財政の解釈に触れ、これを西南戦争後のインフレ収縮策と見るのは、岩倉、伊藤政治の裏の意図を見ない眼であると批判する。その根拠となる『自由党史』も、それ自体を党派のためのもので、それゆえに、偽造をするなどと考えるのは常識はずれであるとし、資料的な部分には客観性があると述べる。

47 松本清張「奇怪な『史観』—林房雄との小さな論争—」『現代と文学』一九六三年八月、二八・三二頁。

48 松本清張『昭和史発掘』前掲、第十三巻、二三四頁。

49 松本清張『北一輝論』前掲、四〇一頁。

50 山本健吉「文芸時評 完結した史伝二つ、通説に従う『火の虚舟』精神分析的な『頼山陽』」『読売新聞』一九六七年七月二十六日夕刊、松本清張「時評という感想文 山本健吉氏の『火の虚舟』評について」『読売新聞』一九六七年、一九六七年八月十六日、松本清張「再び山本健吉氏へ『読売新聞』一九六七年八月二十三日」。

51 宮中におけるシャーマニズム的な宗教性の残存、三種の神器のもつ問題については、『昭和史発掘』や『小説東京大学』に断片的にみられ、それらの断片は『神々の乱心』で結実する。以上から推測すると、清張の天皇論の裏面には実証ではとらえられない神秘主義的な側面があり、この側面を表現するには小説という主張を取らざるを得なかったと考えられる。

52 松本清張『松本清張全集十七 北の詩人・象徴の設計』文藝春秋、二〇〇二年、二〇八・二二九頁。

53 前掲書、二七二頁。

54 前掲書、二七六頁。

55 前掲書、二八〇頁。

56 前掲書、三四三・三四五頁。

57 松本清張『松本清張全集二十一 小説東京大学・火の虚舟』文藝春秋、二〇〇二年、七五頁。

58 前掲書、一〇四頁。

59 前掲書、二一七頁。

60 前掲書、三九三頁。

61 前掲書、四一〇頁。

62 前掲書、四三六頁。

63 前掲書、四五一頁。

64 前掲書、四五二頁。

65 松本清張「対談 昭和史発掘」文春文庫、二〇〇九年、七五頁。

66 松本清張『松本清張全集三十二 昭和史発掘』文藝春秋、二〇〇三年、四八三頁。

67 松本清張『松本清張全集三十四 半生の記・ハノイで見たこと・エッセイより』文藝春秋、一九九四年、八二頁。

68 松本清張「私のものの見方考え方」大和出版、一九九二年、九五頁。

69 松本清張『万世一系』天皇制の研究『諸君！』一九七八年一月、一七八・一九〇頁。また、田村栄『続・松本清張 その人生と文学』清山社、一九七七年、二五九・二六〇頁も参照。

70 松本清張『松本清張全集六十五 清張日記・エッセイより』文藝春秋、一九九六年、一六八頁。

71 前掲書、一七六頁。松本清張『史観宰相論』文春文庫、一九八五年、四

九・五〇頁も参照のこと。

<sup>72</sup> 『史観宰相論』前掲、一五九・一六九頁、一八三・一八四頁。本書はそれ以前の主張を精緻化したのが、それにとどまらない意義も有している。それは、日本の軍国主義化の一因に昭和恐慌と新聞の偏った報道を挙げていることである。二つの要素に共通するのは、いずれもが国家や政府とは直接関係のない当時の日本社会から生じた出来事であるという点である。前者によって浜口雄幸狙撃事件、血盟団事件が引き起こされ、このようなテロ事件は五・十五事件へと引き継がれた。後者によって、軍部の動きは抑えられるどころか、国民に支持されているかの印象が作り出され、戦争に向かわせる世論づくりがなされた。

<sup>73</sup> 『史観宰相論』前掲、二〇六頁。

<sup>74</sup> 『清張日記』前掲、三〇五頁。

<sup>75</sup> 同じ指摘は石黒吉次郎『松本清張事典 増補版』勉誠社、二〇〇八年、四二頁においてなされている。ただし、この時点でのかれは、日本の歴史においてそうした支配から脱しようとする動きのほうに傾注している。その結果、描かざるを得なかったのは、そのような動きが封殺され続けた歴史だった。この史観はすでに一九七一年十二の講演で語られている。明治維新後に藩閥政治がおこって、これに対抗する形で自由民権運動が生じる。ところが、これが「明治十二、三年ごろから官憲によって圧迫され、籠絡されて、一部は官憲に妥協する」。そして、残された民間の自由民権運動は「テロ行為」に走ったり、国家主義に転向していくというのである。清張はこの一八〇度の転向がなぜ生じたのかについての分析が「十分になされていない」（松本清張『社会評論集』講談社文庫、一九九七年、九二頁）と注意喚起している。

<sup>76</sup> 松本清張『松本清張全集三十一・深層海流・現代官僚論』文藝春秋、二〇〇一年、二三五・二三八、三〇〇・三三七・三三八、三四二・三四三、三七〇、四一二、四四四、四四六頁。

<sup>77</sup> 松本清張『社会批評論集』前掲、二九九頁。

<sup>78</sup> 松本清張『私観・昭和史論』『文藝春秋』一九八八年六月、一四一頁。さらに、天皇を頂点とする官僚ができたのは明治後期からであり、その構築において重要な役割を担った人物として山県有朋を挙げている。清張は「想像の域を出ないが」としながら、山県はフリードリヒ大王を頂点としたプロシアの絶対主義官僚制度を範にとり、明治天皇の神権化を進めたと論じる（前掲論文、一五一頁）。

<sup>79</sup> 松本清張『松本清張全集三〇 日本黒い霧』文藝春秋、一九九四年、四二〇頁。

<sup>80</sup> 半藤一利『文士の遺言』前掲、九三・九四頁。

<sup>81</sup> 前掲書、一〇六頁。

<sup>82</sup> 松本清張『随筆 黒い手帖』中央公論社、一九六一年、二三四頁。

<sup>83</sup> 同時代的な反響は『オール讀物』二六（四）、一九七一年、一八六・一八七頁の好意的評価を見よ。

<sup>84</sup> 木下半治『日本國家主義運動史』岩崎書店、一九五二年。

<sup>85</sup> 戸坂潤『戸坂潤全集第二巻 日本イデオロギー論』勁草書房、一九七〇年。

<sup>86</sup> 丸山眞男（古矢旬編）『超国家主義の論理と心理他八篇』岩波文庫、二〇一五年、二六頁。清張は明治の国家体制を論ずるにあたって、久野収、鶴見俊輔『現代日本の思想―その五つの渦―』岩波新書、一九八六年、第四章の「顕教」と「密教」の概念を利用している。ただし、浅田光

輝・中村秀一郎『日本ファシズムの諸問題』岩崎書店、一九四九年のよ  
うな抽象度の高い議論に対して清張はあまり賛同しなかったであ  
う。子安宣邦『日本近代思想批判―国知の成立』岩波現代文庫、二〇〇  
三年、二二五―二四七頁、色川大吉『明治精神史(下)』岩波現代文庫、二  
〇〇八年三〇八―三〇九頁も参照。

<sup>87</sup> 前掲書、一八〇頁。

<sup>88</sup> 橋川文三(筒井清忠編・解説)『昭和ナショナリズムの諸相』名古屋  
大学出版会、一九九四年、四一―四二頁。また、かれらと北一輝のイ  
デオロギー的接点については、橋川文三『昭和維新試論』講談社学術文  
庫、二〇一三年、一四章を参照。青年将校の精神分析については竹山護  
夫『近代日本の文化とファシズム』名著刊行会、二〇〇九年、二二四―  
二二五頁および、高橋正衛『二・二六事件「昭和維新」の思想と行動  
増補改版』中公新著、一九九四年、一四〇―一四八、一五六―一五八頁に  
詳しい。

<sup>89</sup> 藤原彰『天皇制と軍隊』青木書店、一九七八年、五九―六〇頁。清張に  
比して藤原は、個々人の責任よりもむしろ軍組織の問題に焦点をあ  
て、天皇制と宮中グループの責任を追及している。

<sup>90</sup> 橋川前掲書、一〇九頁。橋川の研究で注目すべきは、革新官僚たち  
が、第一次世界大戦後、すなわち「日本人の生活感情もしくは政治理念  
の中にファシズムをうけいれるような徴候がひろがり始めた」時期に  
大学を卒業しているという事実を指摘していることである(一三四―  
一三七頁)。橋川は丸山のように明治から昭和ファシズムまでを一体  
として見るのではなしに、大正中期以降に明治ナショナリズムとは異  
質のナショナリズムが台頭してくると論じる(筒井解説、前掲書、二八

〇―二八二頁、なおこの点については遠山茂・今井清一・藤原彰『昭和  
史』岩波新書、一九五九年七二頁も参照のこと)。そうした新しい形の  
ナショナリズムの形成を考察するにあたって、橋川は日本浪漫派に着  
眼し、かれらの精神構造を分析している。

「保田のいうように日本ロマン派は、満州事変とマルクス主義の敗  
北という衝撃を真正面からうけとめた『二等若い青年のあるデスパ  
レードな心情』を母胎として生まれている。『…中略…』すべて存在する  
ものの存在がその確定的意味を喪失し、人間における信条体系の一義  
性が消失した状態がそこにはあった。『…中略…』日本ロマン派のロマ  
ン主義は、日本の小市民層にかつてあらわれたいかなるロマン主義よ  
りも『過激』であり、その内面性において極度に『イロニカル』な存在で  
あった。それは、その社会的存在の意味を自ら抹殺しかねない構造を  
もってあらわれたのである(橋川文三『日本浪漫派批評序説』講談社  
文芸文庫、一九九八年、一八二―一八五頁。また五八、二一五頁も参照)。  
哲学界への批判としては子安宣邦『日本ナショナリズムの解説』白澤  
社、二〇〇七年、一五三―一八六頁。

<sup>91</sup> 半藤一利『昭和史一九二六―一九四五』平凡社ライブラリー、二〇〇  
九年、八〇、八六、一一九頁。

<sup>92</sup> 保阪正康『ナショナリズムの昭和』幻戯書房、二〇一六年、二二六―  
二二七頁。

<sup>93</sup> 前掲書、二五頁。

<sup>94</sup> 前掲書、三一―三二頁。

<sup>95</sup> たとえば、松本清張『私観・昭和史論』前掲論文、一三八頁。

<sup>96</sup> 松本清張『小説と取材』オール讀物』二六(七)、一九七二年、一六一

・一六九頁。ただし、二・二六事件後にも一定の自由があったとする坂野潤治（一九三七）の仮説も検討されるべきであろう（坂野潤治『昭和史の決定的瞬間』ちくま新書、二〇〇四年、一二七、一二八、二一六、二一九頁）

<sup>97</sup> 筒井清忠『二・二六事件とその時代―昭和期日本の構造』ちくま学芸文庫、二〇〇六年、一〇五、一〇六頁。

<sup>98</sup> 前掲書、二六八、二九四頁。同様に、北博昭『二・二六事件全検証』朝日新聞社、二〇〇三年も清張の記述や史料に一定の修正を加えながらもかなり多くの部分を依っている（五〇、五一、八一、二四、一五四、一六三、一七一、一八四頁）。

<sup>99</sup> 筒井清忠『二・二六事件と青年将校』吉川弘文館、二〇一四年、第五章。また、研究史のなかに松本清張の『昭和史発掘』を入れている（二四二頁）。

<sup>100</sup> 須崎慎一『日本ファシズムとその時代―天皇制・軍部・民衆』大月書店、一九九八年、四四頁。とはいえ、軍が実権を握りつつも、どこまで行っても結局は明治憲法という枠組みによって縛られ、国民統合は不可能だったとする片山杜秀『未完のファシズム―「持たざる国」日本の運命』新潮選書、二〇一二年、二二六、二二七頁のような見解もある。

<sup>101</sup> 須崎前掲書、一四八、三三三、三六二頁。

<sup>102</sup> 前掲書、二九九、三〇〇頁。

<sup>103</sup> 前掲書、二九六、二九七頁。

<sup>104</sup> 須崎慎一『二・二六事件 青年将校の意識と心理』吉川弘文館、二〇〇三年、一二五頁、また一二六頁では清張と藤井の編纂した資料も参照していることが分かる。

第18回 松本清張研究奨励事業研究報告書  
発行日 平成三十年(二〇一八)年三月三十一日発行

〔編集・発行〕

北九州市立松本清張記念館

北九州市小倉北区城内二―三

電話(〇九三)五八二―二七六一

〔印刷・製作〕

有限会社シーズ

本報告書掲載の本文及び資料の無断転載・複写を禁じます。  
松本清張記念館ホームページ <http://www.kidn.jp/seicho>  
登録番号 北九州市印刷物登録番号 第1709177F